

氏名 (生年月日)	オンベシン 遠部 慎 (1976年3月21日)
学位の種類	博士 (史学)
学位記番号	文博甲第114号
学位授与の日付	2017年3月16日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	西日本における縄文時代貝塚の出現と形成に関する研究
論文審査委員	主査 小林 謙一 副査 白根 靖大・坂本 稔 (人間文化研究機構)

内容の要旨及び審査の結果の要旨

① 博士論文の主題 (テーマ) と概要

本研究のテーマは日本列島西部における海産資源利用の開始の様相をさぐる研究であるが、その前段階として、瀬戸内地方を取り上げ、瀬戸内海の形成と貝塚の成立状況の検討によって、環境変化とそれに対する文化適応過程を整理することにある。海産資源に日本人が積極的にかかわることになるのは縄文時代からであり、縄文時代早期の貝塚が最古であることは知られている。貝塚のほぼ90%は東日本に存在し、最古の貝塚として縄文早期初頭に当たる夏島貝塚・西之城貝塚があるが、西日本の貝塚の存在については注意が払われることは少なく、その評価も定まっていなかった。本研究によって、西日本における貝塚、特に瀬戸内地方の貝塚について年代的位置づけを明確化し、はじめて形成順序を元とした貝塚群の総体的な評価を加えた。西日本において、先史社会人類が、海面上昇に伴う「海」の形成に適応していった過程について、自然科学的検討を加味した考古資料分析により明らかにしたことが、本研究の独創的な価値を高めているところである。

本研究の結果から、西日本における各地域の縄文文化出現期 (早期段階) の様相が明らかになっていくと考えられる。本研究での縄文早期を中心とした分析手法は、長期的な視野から人類の海産資源利用に関する検討を実践するための基盤となると評価できよう。西日本における縄文時代開始期の様相を明らかにすることは、日本列島に暮らした先史時代の人類活動を明らかにする上で欠かせない視点であり、同時に考古学的研究法の深化を果たすものとして、重要な意義を持つと評価できる。

② 博士論文の構成 (目次) と内容

博士論文は下記のように構成されている。第1章～第4章の一部は、既に論文として公開されている内容を大幅に書き改めたものである。

序

- 第1章 縄文海進と押型文土器研究
- 第2章 押型文土器の年代整理
- 第3章 貝類の年代測定
- 第4章 瀬戸内海の縄文時代早期貝塚の年代研究
 - 礼田崎貝塚の研究
 - 井島大浦遺跡の研究
 - 犬島貝塚の研究
 - 黄島貝塚の研究
 - 黒島貝塚の研究
- 第5章 まとめ
- 引用・参考文献・英文要旨

本論は以下の5章の構成からなる。

第1章 縄文海進と押型文土器研究

2014年に発表した「東海地方における押型文土器期の年代測定集成」『東海地方における縄文時代早期前葉の諸問題』などを下敷きとし、これまでの縄文海進期の年代測定に関する諸研究について、まとめた。その中で、半世紀以上前のデータが大きな意味をもっていることが明らかとなった。

第2章 押型文土器の年代整理

2009年に発表した「第4部 分析・考察 第9章 上黒岩遺跡の押型文土器の炭素14年代測定」などを下敷きとし、西日本の押型文土器編年と、土器付着炭化物を基軸とした年代整理を行った。

第3章 貝類の年代測定

2009年に発表した「貝類の年代測定」を骨子として、貝類に関する年代測定を実施するうえでの基本的な方針を整理した。貝種の違いによって、整理することが可能であることを示した。

第4章 瀬戸内海の縄文時代早期貝塚の年代研究

西日本の中でも、押型文土器期の貝塚群のまとまっている瀬戸内海の貝塚の考古学的整理を行い、おもに汽水性、鹹水性の貝塚の分類を行ったうえで、年代測定を行った。ここでは、各事例について、具体的にまとめられている。

礼田崎貝塚の研究 2007年に発表した「瀬戸内海最古の貝塚—豊島礼田崎貝塚の再評価」を骨子とする。本研究の結果、瀬戸内海最古の貝塚であることが確定した。

井島大浦の研究 礼田崎貝塚に後続する未検討の貝塚について、検討を加えた。汽水性貝塚としては礼田崎に後続する部分が確認できた。

犬島貝塚の研究 2008年に以降に発表した『犬島貝塚の発見』（六一書房）を骨子として、各論

考をまとめた。瀬戸内海では約半世紀ぶりの発見となる縄文時代早期貝塚であり、新たなデータの提示ができた。

黄島貝塚の研究 2003年に発表した「黄島貝塚再考」および2008年に発表した「黄島貝塚の年代測定」を骨子として、黄島貝塚の年代についてまとめた。8400±350BP というよく知られた測定値のほかに新たなデータを追加した。

黒島貝塚の研究 2005年に発表した「広島県立歴史文化博物館所蔵資料紹介：岡山県瀬戸内市黒島貝塚」2007年発表「瀬戸内海における縄文海進期の基礎的検討」を骨子とし、これまで年代データがほとんどなかった本貝塚の年代研究を行った。

第5章 まとめ

以上の検討の結果、土器付着炭化物を用いて、西日本の押型文土器の実年代を大川式 9150-8750calBC、神宮寺式 8650-8450calBC、神並上層式 8300-8250calBC、山形文期 8250-7950calBC、黄島式 7600-7400calBC、高山寺式 7400-7200calBC、終末期 7100-(6800calBC頃までか)、と整理した。

さらに、瀬戸内海の貝塚群の貝種組成を整理し、ヤマトシジミからハイガイへと変遷することが明らかとなった。こうした変化は、半世紀前から指摘されてきたことではあったが、ヤマトシジミ段階が土器型式という山形文期を主体とする段階に出現し、ハイガイの出現はおおむね黄島式期に該当し、さらに両者の中にも段階差が認められる可能性が高いことが明らかになった。黄島式以降については、瀬戸内海島嶼部では貝塚を形成していない可能性が高い。つまり、瀬戸内海の形成に伴い、貝塚群が陸へと推移している可能性が高く、環境変動に伴って、遺跡立地が変化している可能性が高いと考えられた。

③ 博士論文の成果と若干の問題点

・論文の論理性および独創性について

本研究では考古学本来の資料解析を中心とした文化史的再構成の部分と、最新の年代測定などの手法を用いた自然科学的分析の部分とからなる。後者では、申請者自身が選択した、自身のオリジナルの分析データをもとにして、当該時期の研究に取り組んでいる。自身が記録化したデータをもとに、年代測定を実施するという研究手法は、土器付着炭化物研究では多く実施されているが、本論文でおこなわれている貝塚の貝殻試料の分析は、独自の研究手法に基づいている。そのため、研究は独創性に富み、同時にこれまでの先行研究にも十分に配慮することで、客観性も保っている。

・研究目的の達成度合い

本研究は、西日本において貝塚が出現・展開する縄文時代前半期を相対的に把握するために、まず貝塚の出現に的を絞って、その形成過程を環境変動と合わせながら明らかにすることを目的としている。本研究の中心となる瀬戸内海において、貝塚が出現・展開する縄文時代前半期いわゆる海進期（縄文海進）の研究については、これまでは具体的な年代データが乏しく、本格的な海産資源

の利用段階（前期段階）の開始のプロセスについては、明らかにする試みはこれまでに十分といえなかった。

その点を解決するために、以下のような方向性をとっている。年代測定の方法論を整理し、考古学的に大まかな土器編年網を近畿地方の押型土器文化を基軸として整備し、土器に付着した炭化物を中心とした年代測定成果を蓄積して西日本全体に通じる縄文早期前半期の実年代を明らかにした。次いで貝塚の貝類の分析によって、海洋リザーバー効果の影響について西日本特に瀬戸内では考慮する必要の度合いが少なく、実年代を明らかにする作業を行う上で適切な地域であることを確認した。瀬戸内海の個々の貝塚の試料を分析し、その年代的な位置づけを確定させ、実年代を把握したうえで、西日本における先史時代における初期の貝塚形成を論じ、海産資源の利用形態の変遷を明らかにする基盤としている。さらに、今後の展望として、上黒岩岩陰遺跡など内陸部の貝類出土状況の様相、九州地方や東海地方など瀬戸内地域以外の地域への検討を準備し、汎日本列島としての視点から縄文文化を貝塚文化として捉え、その成立過程の解明へと論を進める基盤を用意している。

本研究での最大の成果は、縄文時代草創期～早期前半にかけての瀬戸内海の形成過程と、順次出現する貝塚の年代的整理に成功し、両者の関係を明確に示したことである。瀬戸内海、ひいては西日本初めての貝塚の出現を、礼田崎貝塚 7900～7600calBC に求めることに成功した。さらには、それが単発的なできごとではなく、自らが調査した犬島貝塚が 7500calBC に当たるのをはじめ、瀬戸内海の成立から内海としての環境変化に応じながら黄島貝塚など多数の貝塚が形成されるに至る過程について、歴史的復元を示した。年代的組織化および瀬戸内における貝塚の形成過程の復元という点において、十分な成果を挙げたと言うことができ、本研究の目的の半ば以上は達成したと捉え得るであろう。

縄文研究の中でもやや遅れていた西日本を取り上げ、瀬戸内海の形成という環境史と、貝塚や岩陰遺跡の設営に見る文化史的な再構成を組み合わせた視点は、その他の地域・時代の考古学的研究にも新たな分析の視点を提示するものであり、極めて重要な研究であると評価できる。

研究成果の評価としては上記につきるが、本論文はいささかの問題点も残している。今後の研究の進展のためにも、あえて細かな点も含めて指摘しておきたい。

・論文の形式について

章立ての構成、各章の内容は整理されているといえる。個々の内容については査読論文を含む既出論文が多くを占め、すでに一定の評価を得ているところである。新たな試料による追記部分が認められるが、それらについては巻末に一覧表を明示してある。このローデータについては、研究の客観性を担保する重要な提示であるので、初出の出典を含め、より充実を図っていくとともに、今後も更新が期待される。

なお、問題点として各論考は、十分に考古学の研究論文としての体裁および内容を有しているが、

1 から 4 章の基幹をなす論文が、もともとは別々に執筆し研究誌に掲載された論文のため、体裁に違いがあり全体として博士論文としては、文章のつながりが必ずしも整然としていない。近く、研究書として刊行する際には、軽微な補筆・改定が望まれる。

・発展的視点の提示について

本研究は、自身のオリジナルの分析データをもとにして、西日本の先史社会の海産資源利用を明らかにしようとしている。その点でも十分にオリジナリティを有しているが、申請者も記しているように測定には多数の共同研究者の関与がある。これら共同研究者についても明記してあり配慮されているが、データ一覧表にも初出報告を明記するなど、具体的に示すとより明確になったものと思われる。この点についても研究書として刊行されるときには留意を願いたい。

研究の今後の発展性についても、終章でより詳しく述べるべきであったろう。例えば申請者は、瀬戸内海地方の最古の貝塚の一つである犬島貝塚の調査研究および保存に長く関わっている。犬島貝塚は以前に産業廃棄物の廃棄問題でクローズアップされた直島の近くであり、現在はエコミュージアムとして野外美術館などが展開しているが、その一環として NPO 活動として遺跡保存活動に取り組んでいるのである。研究を行うことと同時に、地域社会に還元すべく活動していると評価できる。各地域の最古の「貝塚」を分析することは、現代社会と考古学の接点ともなるべく実践していることを示し得るのであり、例えば最後の展望などで僅かにでも触れてもらえば、さらに考古学という学問自体に対する新鮮な眼差しの例示として、より本研究の独創性を発現することができたものと指摘したい。

申請者は文頭に宮本常一の提言を挙げ、瀬戸内海の島々に暮らす人々の由来を自らにも問いかけている。その答えは、申請者が論文の目的で挙げたところの、西日本における貝塚文化の成立過程を明らかにすること、ひいては初期縄文文化の成立とその拡がりを持つ歴史的意義について考えることにつながる。本研究では、瀬戸内の一地域を題材として、その答えの一端を示したといえる。その問いに答え続けていく必要性は残されており、今後も検討を重ねていくものと期待したい。

④ 全体的評価と合否判定

本論文の成果は、下記にまとめることができる。

- 1) 西日本縄文時代早期の年代的枠組みを明確化した。
- 2) そのための方法として押型文土器群の較正年代と、貝塚の層位別の貝殻試料の炭素 14 年代測定を利用し、貝塚の変遷を明らかにした。
- 3) 瀬戸内海最古（現段階において西日本最古）の貝塚を明確にした。
- 4) 最古の貝塚の一つである犬島貝塚を発見、発掘調査によりその内容を明らかとした。
- 5) 瀬戸内海の形成過程と縄文早期文化の発展過程を結びつけて説明した。

以上のうち 1) から 4) については申請者の 14 年以上にわたる研究をまとめたものである。その間に執筆した論文も 20 本を超えている。申請者の研究は、その膨大な論文の量が背景となる研究蓄

積から、西日本における各地域の出現期（早期段階）の様相を明らかにしてきたと既に学界でも評価を得てきたところである。しかしながら、これまでの申請者による成果の公表は断片的に留まり、本格的な海産資源の利用段階（前期段階）までのプロセスまでについては、これまでは十分には示しえなかった。そのため、これまでの研究について集成した上で大幅に見直し、早期を中心とした試料の収集、分析を加えることによって、長期的な視野にたった人類の海産資源利用のあり方について検討をするべく、論を進めたものが本研究である。即ち、端的に言えばこれまでの研究蓄積に新たな検討を加味して、はじめて瀬戸内全体を見通した文化史的再編成をまとめ上げたと捉えられる。

環境との適応形態の変化について、ダイナミックに史的復元を図っていくためには、海進という環境変動とそれに対応した貝塚の形成という縄文文化の特質について整理しておく必要があるが、本研究はまさにその実践研究として、独自の位置を占める研究になっている。縄文文化研究として高く評価できるとともに、自然科学的分析手法と考古学的分析とを高度に組み合わせた実践的研究として、これからの日本考古学研究の方向性に大きな指針を用意するものと評価したい。

本論文は、その高い学問性から鑑みて、博士（史学）に値する論文と認める。